



Title	<書評>川島智生著 『近代京都における小学校建築 1869～1941』
Author(s)	小川, 玲美子
Citation	デザイン理論. 2015, 66, p. 86-87
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56362">https://doi.org/10.18910/56362</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

川島智生著

## 『近代京都における小学校建築 1869～1941』

ミネルヴァ書房, 2015年, 380ページ

小川玲美子／金沢美術工芸大学 柳宗理記念デザイン研究所

本書は京都府という一地域に着目し、近代日本において取り入れられた教育機関、とりわけ小学校建築が成立する過程とその変容を他地域との比較も交えつつ俯瞰したものである。

序章では「研究の目的」として初等教育機関である小学校と、京都府に着目した理由が述べられている。これによると、戦前までの小学校は経営や建設事業などの実質的な運営は学区で区切られた各地域に任されており、戦前まで我が国唯一の国民機関であった小学校は、言わば地域社会のシンボルであった。つまり、小学校とは地域単位での民意が端的に表れている建物であった。そして、その意味において、京都の小学校建築を検証することは大変意義深い。また、「京都」という一地域に着目している点は、一見して限定的に思われるかもしれないが、この地域を初めとする関西の都市部では、小学校建築の近代化の象徴である建築が散見され、日本全国の小学校建築の研究をする上で非常に重要な役割を持っている。

第一章では、明治前期の京都における小学校の成立と、地域における役割、建築的特徴が豊富な事例を通して述べられている。また、大阪、神戸、東京などの他の都市との比較によって、より京都独自の小学校の性格が浮き彫りにされている。

京都では明治5年の学制発布より3年も早い明治2年に、京都の近代化政策を進めていた京都府権大参事植村正直が中心となり、64の番組小学校が一斉に設置されることとなった。

藩政期の都市において、地域の単位は町組と呼ばれ分けをされており、その中心には町会所が置かれていた。明治初期の京都の小学校設置では、町組の概念を学区として引き継ぎ、またその機能も小学校が担おうとしていた。これは教育の近代という目的以外に、行政の最小単位であるかつての町組の再編という性格を持っていた。筆者はこうした町組の再編・取り込みを首都としての特権立場を失った京都において、混乱した市内の状況を救うためであり、そこには明治新政府が小学校を利用し地域の末端に政治権力を浸透させるためであったと述べている。また、小学校が地域社会の中心となり、前時代の町会所の役割を引きついでいたことは、施設内容を見ても明らかである。算術場などの教育空間のほかに、面積を大きく占有していたのは町組の会議所として使用されていた講堂であった。後にこの講堂を重視したプランは顕著になっていくと筆者は指摘している。つまり小学校が単なる教育機関ではなく、行政の出先機関であったことが窺える。

また、その建築的特徴は、基本的に京都府の図面に基づく内容であったが、各校によって微妙な差異があった。意匠においては防火櫓や望楼などが併設され、藩政期以前の伝統的な意匠が目立っていたようである。また、それ以降、公家の邸宅や、廃仏毀釈の煽りを受け不要となった寺社仏閣の資材が転用されるなど、他地域では見られない、京都ならではの意匠を持った小学校が登場している。それと同時に洋風意匠を持った小学校もいくつか誕生しており、多様な外観を持っていた。

第二章ではコンクリート作りの小学校校舎が登場するまでの過渡期において、小学校令発令に始まる一連の法制度の整備が及ぼした建築面への影響が述べられている。これによって小学校建築のプランは定例化がなされるようになった。しかし、設計は各学区の裁量に任されており、明治後期に新設されていた。この時期の校舎はほとんどが唐破風や千鳥破風などの和風意匠を取り入れている。これは地域のシンボルとしての小学校に格式の高さや豪華さが求められた結果だという筆者の指摘は、象徴的であるように思える。明治期以降、特権階級の家屋の象徴であった和風意匠が小学校建築に採用されたのは、庶民の価値の規範が依然として藩政期におかれていたとも言え、そのような市井の人々の、近代以前には持つことが叶わなかった願望が実現された結果ではないだろうか。また、明治後期の小学校建築に擬洋風のものがほとんど建設されていない理由として、筆者はこれは和風意匠が小学校にもっともふさわしいものと判断されていた為としている。

第三章では、京都の学校建築におけるコンクリート造りの導入と、それを促進させた背景である災害、自治組織のシステムの変化について述べられている。

昭和前期まで、小学校建築の設計はそれぞれの学区に任されていた。そのため富裕学区においては規模の大きな校舎を建てるのが学区のステイタスとされていたが、学区制度の廃止の危機に即し、高額な費用を要する鉄筋コンクリート造りの校舎が相次いで建てられた。さらに、大正後期から昭和初期に発生した大風水害により、木造よりも堅牢なコンクリート造りの校舎の需要は高まっていた。

また本章の時代区分の意匠の検討においては、当時ほとんどの小学校建築を担当していた京都営繕課の組織構造の変容や、技師に注

意を払いつつ仔細に述べられており、時期による変化の体系化が試みられている。

第四章は、第三章の内容を踏まえ、昭和9年に京都府の木造小学校に甚大な被害を与えた室戸台風とその復興との関係も絡め、本格的にコンクリート造りの校舎が建設されていく過程が述べられている。本章で特徴的なのは、その建築スタイルや、タイルなどの細部に注意が払われている点である。更に、三章にひき続き、この時期に建設に携わっていた営繕組織に着目し、この中で高等教育を受けた技師の増加により、小学校建築を専門とした課が設置されていたことを明らかにしている。

第五章では、それまでに幾度と登場した京都営繕組織の沿革と技術者について、新出の資料を紹介しつつ述べている。表舞台からは消えがちな行政の建築家や技師に焦点を当てる筆者の姿勢は敬服させられると同時に、営繕組織に所属していた川村秀介の回顧録の紹介と検証は重要な研究成果と言えるだろう。また実際に小学校建築に携わった技師本人の手記からは、営繕組織の実態と、当時の状況が生々しく伝わってくる。

本書を通読し、特に第二章で述べられていた和風意匠の尊重には関心を引き付けられた。これは近代京都の建築を考慮する上で、実に重要な指摘であり、当時の人々の空間意識や、美的意識を探るにあたり、有効な事例であると言える。

また、付録として筆者が執筆時までに集めた「京都の番組小学校」は、そのデータ量・質が圧巻であり、本書は京都の小学校建築に限らず、一地域の近代建築成立の過程を俯瞰する際、貴重な資料となるだろう。